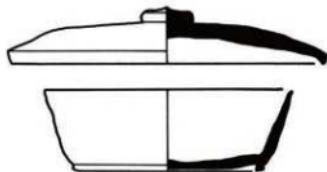


陶邑窯跡群発掘調査概要・II

府営ため池等整備事業「光明池地区」に伴う調査



1999. 3

大阪府教育委員会



はしがき

堺市南部から和泉市北部に広がる泉北丘陵にはわが国で最大規模の須恵器窯跡群が立地しています。そこでは古墳時代から奈良・平安時代にいたる約500年間の長期にわたって、須恵器を焼き続け、その製品は全国に運び出されていましたことがわかっています。これは昭和40年代に始まった泉北ニュータウン建設などの開発に伴う発掘調査で明らかになった成果で、光明池周辺地区もその一角を占める重要な地域です。

さて、このたび大阪府農林水産部によって、光明池を周回する形で、ため池整備事業として遊歩道が設置されることになりました。この事業は都市化が進展した中にあって松林など豊かな緑に囲まれた光明池周辺を府民の憩いの場として活用し、農業と都市住民の交流の場として整備することを目的としたものです。そこで、本府教育委員会文化財保護課では、事前に試掘調査を実施し、遊歩道に光明池48号窯がかかることを確認、今回の調査にいたったものです。

今回の調査にあたりまして光明池土地改良区等、関係諸機関をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに心から感謝いたします。また、今後とも文化財保護行政に皆様方のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

例 言

1. 本書は府営ため池等整備事業「光明池地区」予定地内、堺市城山台5丁地内に所在する陶邑窯跡群光明池第48号窯跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は大阪府農林水産部より依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課調査第1係の技師、西川寿勝が担当、平成10年11月に着手し、平成11年3月31日にすべての事業を終了した。
4. 本文・挿図に記載した標高は東京湾標準潮位（T.P.値）で、座標は国土座標第VI座標系により、挿図及び本文中の北は座標北をしめす。
5. 本書の執筆・編集は西川が担当した。

目 次

はしがき

例言

第1章 周辺の調査

1. 甲斐田川水系の窯分布.....	1
2. 甲斐田川水系での発掘調査.....	1

第2章 光明池第48号窯の調査

1. 調査に至る経過.....	5
2. 層序と遺構.....	5
3. 遺物.....	8

第3章 その他の窯の現況調査

1. 光明池第41号窯の現況調査.....	9
2. 光明池第41号窯採集須恵器.....	9
3. 光明池第14号窯の現況調査.....	11
4. 光明池第14号窯採集須恵器.....	11
5. 光明池第23号窯の現況調査.....	13
6. 光明池第23号窯採集須恵器.....	16
第4章 まとめ.....	17

実測遺物対照表

抄録

挿 図 目 次

第1図 甲斐田川水系遺跡分布図.....	2
第2図 光明池周辺調査窯.....	3
第3図 光明池採集石器.....	4
第4図 今回調査区と光明池48号窯推定位置図.....	5
第5図 調査区位置図.....	6
第6図 調査区土層図.....	6

第7図	光明池48号窯出土須恵器	7
第8図	光明池41号窯位置図	9
第9図	光明池41号窯採集須恵器	10
第10図	光明池41号窯現況平面及び断面略測図	10
第11図	光明池14号窯位置図	11
第12図	光明池14号窯採集須恵器	12
第13図	光明池14号窯現況平面及び断面略測図	12
第14図	光明池23号窯位置図	13
第15図	光明池23窯現況平面略測図	14
第16図	光明池23窯断面略測図	14
第17図	光明池23号窯採集須恵器	15

表 目 次

第1表	甲斐田川水系内遺跡一覧	2
第2表	光明池48号窯跡実測須恵器対照表	7
第3表	その他の実測遺物対照表	19
第4表	地区割表示図	20

図 版 目 次

図版表紙 調査区周辺航空写真（98年12月25日撮影）

図版1 調査区遠景・調査状況

図版2 調査区全景

図版3 光明池41号窯・光明池14号窯跡現況・採集須恵器

図版4 光明池48号窯跡出土須恵器・光明池23号窯跡採集須恵器

第1章 周辺の調査

1. 甲斐田川水系の窯分布

わが国最古かつ最大規模の窯業生産跡として知られる陶邑窯跡群は堺市東南部の泉北丘陵一体を中心に狹山市西部・和泉市東南部にまたがる広大な地域に展開する。これらは段丘を分断する石津川・和田川・陶器川・楓尾川などによって区切られ、それぞれの丘陵ごとに窯群の地区単位が名付けられている。今回調査区は光明池をふくむ甲斐田川の流れる谷と和田川本流の流れる谷によって東西を分断された丘陵に位置し、この地域を光明池（KM）地区と呼んでいる。この地区で発見された窯はその発見順にKMを冠した番号で呼ばれている。その窯数は現在約150基、調査された窯数も30基以上に及ぶ。

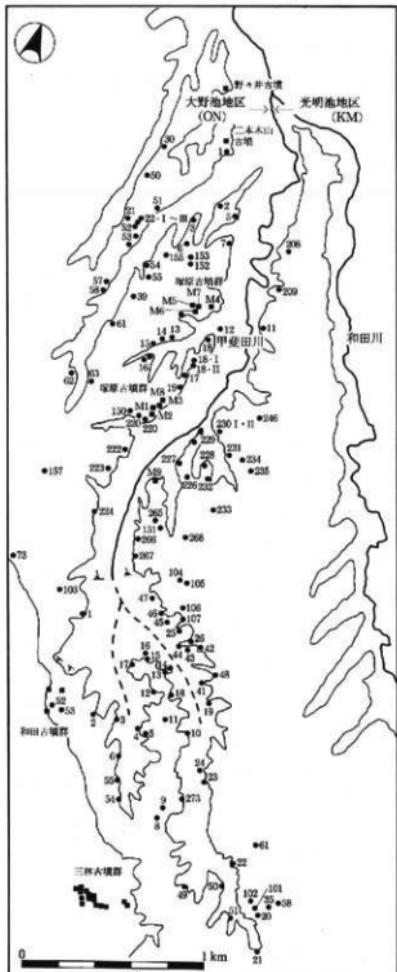
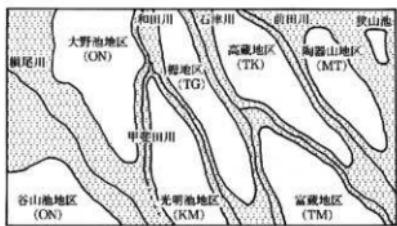
以上のように、光明池地区の窯はこれまでの調査・報告をもとに丘陵単位に分析してきた。ところが、各下流域で須恵器工人の関係する集落が発見されるにつれ、須恵器の搬出や工人の移動は水系を範囲として利用した可能性もある。本節では甲斐田川をはさんで東西の斜面に営まれた遺跡を紹介し、操業と開発の一端を整理したい。これまでの調査にもとづくと、甲斐田川の西斜面は大野池（ON）地区、東斜面は光明池（KM）地区にあたり、約110基の窯と十数基の後期古墳が発見されている（第1図・第1表）。

2. 甲斐田川水系での発掘調査

上記に示した遺跡のうち、発掘調査などでその性格が明らかにされたものは窯が58基、古墳が11基にのぼる（第2図）。中でも5世紀後半段階の窯が多数発見されている。しかし、陶邑窯跡群での操業開始期にあたる定型化前段階の須恵器を焼いた窯は発見されていない。また、上流では奈良時代の窯が目立つ。しかし、陶邑窯跡群の最終段階に位置づけられる奈良時代末から平安時代前期の須恵器を焼く窯の発見はない。

一方、甲斐田川水系に点在する古墳の内、時期が確定するものは6世紀後半頃の構築に限られる。古墳から発見された遺物には被葬者が須恵器生産と深くかかわっていたことを示すものが多くある。楓尾塚原古墳群は主体部の造営に際し、窯で焼かれた埴が内容のわかるほとんどの古墳で発見されている。埴には須恵器大甕の調整と共通する同心円タタキが残るものもある。また、楓尾塚原8・9号墳はカマド塚とも呼ばれる構造で、これは須恵器窯と構造に共通点がみられる梯の主体部である。加えて、須恵器を製作する際に使われるあて具とおもわれる土製品が楓尾塚原2号墳の副葬品中に含まれていた。以上から楓尾塚原古墳群は須恵器工人の奥津城と考えて間違いないだろう。この他に光明池の東南に三林古墳群が、西南に和田古墳群がある。しかし、その詳細は不明である。

このように甲斐田川水系の上流と下流に6世紀後半頃の古墳群が営まれているにもかかわらず該当時期の窯はほとんど発見されていない。逆に5世紀後半、8世紀の窯が多数発見されている



第1図 甲斐田川水系遺跡分布

第1表 甲斐田川水系内遺跡一覧

窯名	時期	調査年	文献
ON 3	-	47	I・III
ON 5	5	47	I
ON16	5	43	I
ON18-I	5	47~	I
ON18-II	5	47~48	I
ON22-I	5	47	I・II
ON22-II	5	47	I
ON22-III	5	47	I
ON32	5・6	47~48	I・II
ON53	5	47~48	I
ON57	5	47~48	I
ON58	5	47~48	I
ON61	5	47	I
ON150	5	47	I
ON151	5	47~48	I
ON152	5	47~48	I
ON153	5	47~48	I
ON154	5	47	I
ON157	5末	48	I
ON220	5	47	I
ON221	5	47	I
ON222	5	47	I
ON223	5~6	47	I
KM 1	5~6	38・54	概79
KM 2	5~6	41	I・概66
KM 3	6末	41	I・概66
KM 4	6末	41	概66
KM 6	5後	41	I・概66
KM10	7~8	41	IV
KM11	6~7	41	I・概66
KM13-I~VI	5~8	38	概64
KM14	5後	10	概64
KM15	6	38	概66
KM16	8	38	I・概66
KM18	6	41・9	概66
KM20	-	41	概66
KM21	-	41	概66
KM22	8	41	I・概66
KM23	8	41	本著
KM26	-	9	概66
KM35	8~9	41	I
KM41	5後	10	本著
KM42	6	9	概66
KM43	6	9	概66
KM44	6	9	概66
KM48	8	10	本著
KM49	-	41	概66
KM50	-	41	概66
KM51	8	41	I・概66
KM101	8	41	I・概66
KM102	8	41	I・概66
KM220-I	7	48~49	I
KM220-II	7~8	48	I
KM233	5	50	I
KM234	6~7	48	I
KM265	5	48	I
KM266	7	49~50	I

I = 「陶邑」 I 1976 大阪府教育委員会

II = 「陶邑」 II 1977 大阪府教育委員会

III = 「陶邑」 III 1978 大阪府教育委員会

IV = 「陶邑」 IV 1979 大阪府教育委員会

概64 = 「陶器山周辺地域窯跡調査概報」 1964

大阪府教育委員会「陶邑須恵器窯跡群調査報告」 I
1966に再録)

概66 = 「和泉光明池地区窯跡群発掘調査概報」 1966

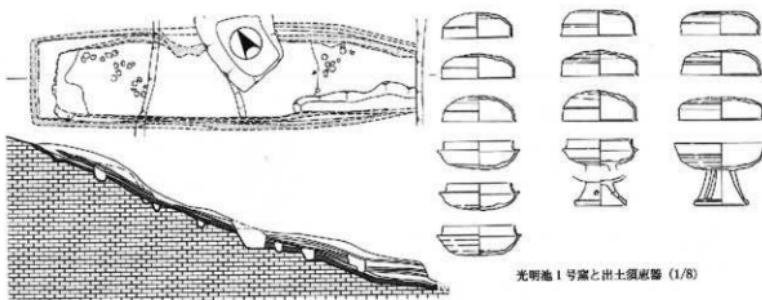
大阪府教育委員会

概79 = 「光明池第1号窯跡発掘調査概報」 1979

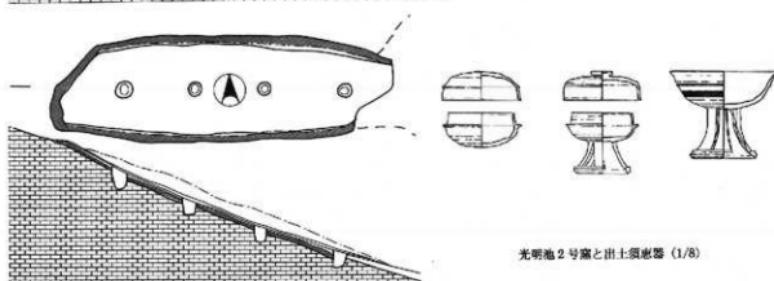
和泉市教育委員会

概98 = 「陶邑窯跡群発掘調査概要」 1998

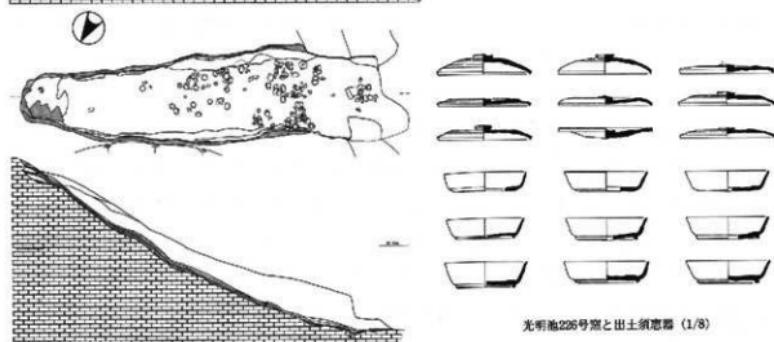
大阪府教育委員会



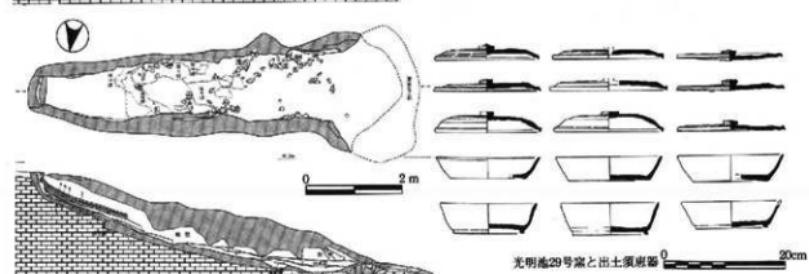
光明池1号窯と出土須恵器 (1/8)



光明池2号窯と出土須恵器 (1/8)

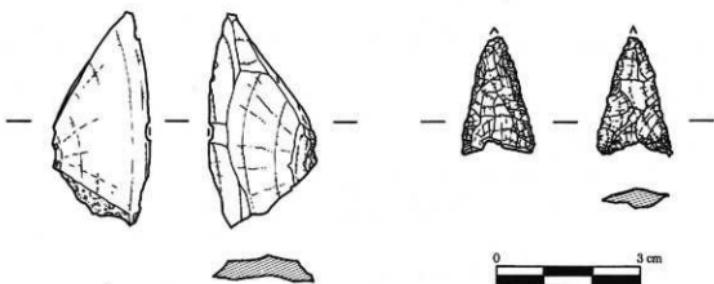


光明池226号窯と出土須恵器 (1/8)



光明池29号窯と出土須恵器 0 20cm

第2図 光明池地区発見の各時期の須恵器窯



第3図 光明池採集石器

にもかかわらずそのころの古墳や集落が見つかっていない。この現象は陶器で操業していた工人の活動範囲が水系をはるかにこえる広域にわたり、集落や墓域が付近につくられなかつたという可能性、または未発見あるいはすでに破壊されたことにより、十分な分析が行えないと状況という可能性である。現段階で結論をみないが、ニュータウン開発で変貌した丘陵を見るかぎり後者の可能性を支持したい。また、光明池の汀面には現在でも須恵器片が各所に散乱し、未発見の窯や遺跡が存在する可能性を予測させる。

今回の調査では、遺跡の広がりや展開について、付近の詳細な検討までには及ばなかった。しかし、光明池の波浪による浸食と風雨の影響で破壊の危険性が高い三か所の窯については略測・遺物採集を行ない、記録保存につとめた。遺跡の把握の必要性は窯業生産に関するに限らない。光明池の浸食された崖面から旧石器時代後期のナイフ形石器や縄文時代後期頃の石鏃が採集できた。ナイフ形石器（第3図1）は長さ4.4cm、幅2.1cm、石鏃（第3図2）は長さ2.4cm、幅1.6cm、いずれもサヌカイト製である。泉州丘陵内では有史以前の状況はほとんど解明されておらず、遺構の調査例もなかった。これらの確認を含め、他の地域についても分布調査を中心とした詳細な遺跡把握が望まれる。今後の課題としたい。

第II章 光明池48号窯（KM48）の調査

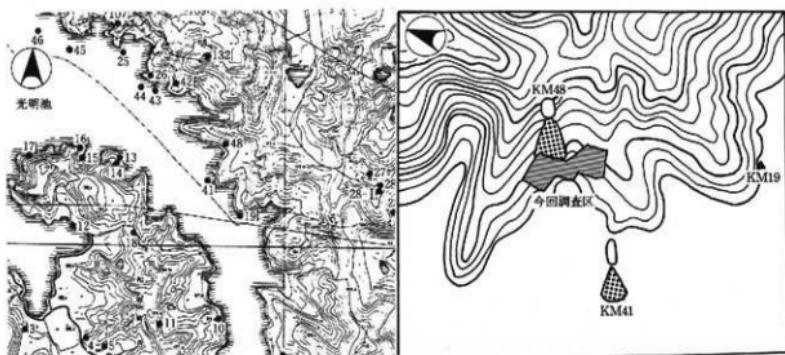
1. 調査に至る経過

光明池48号窯は光明池東岸、大阪府農林水産部で行われている護岸を兼ねた遊歩道建設工事の延長上に位置する（第4図）。この事業と該当地の試掘調査報告については98年に刊行された『陶邑窯跡群発掘調査概要』に詳しいのでここでは省略する。

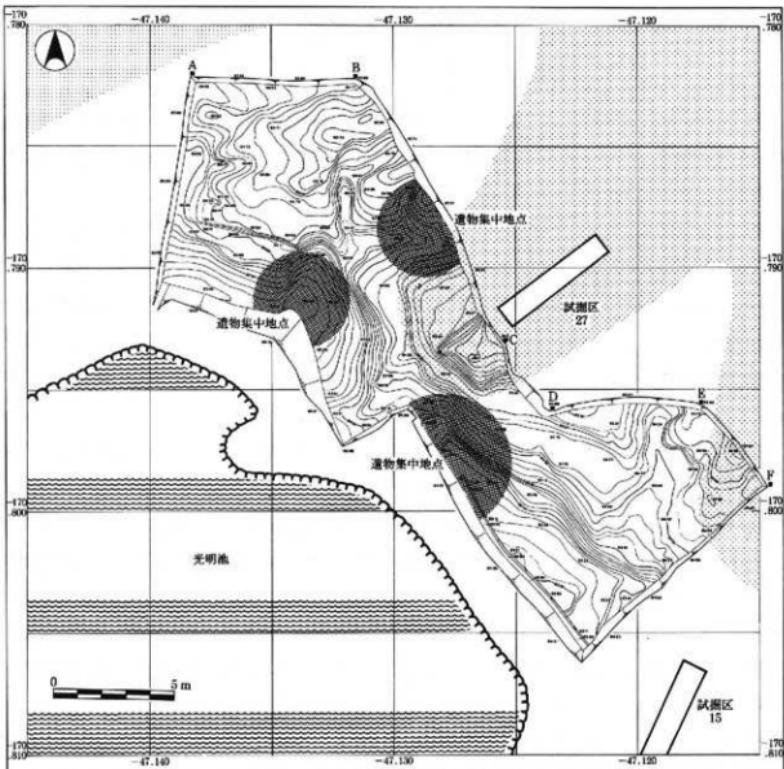
事前に光明池48号窯として認識されていた地点についても開発により破壊される可能性があった。それに先立って実施された試掘調査では奈良時代の須恵器と焼土を含む褐色土の堆積がみつかった。試掘調査では保存協議の手がかりを得るために地形から窯本体を予想できる地点についても試掘坑を設定している。しかし、窯本体は確認できていない。これらを踏まえ、遺物、焼土の発見された地点について、その範囲を含む開発予定地にかぎり事前に発掘調査を実施、記録保存することとなった。

調査位置は大阪府教育委員会地区割基準による、D 5 - 9 - M12区にあたる。調査区はこの地区を更に100等分した南東隅の i 2・i 3・j 1～j 3区に位置づけられる（P20参照）。ただし、今回は複雑な地形に添って調査区が設定されていたため、この基準で遺物の取り上げはしていない。

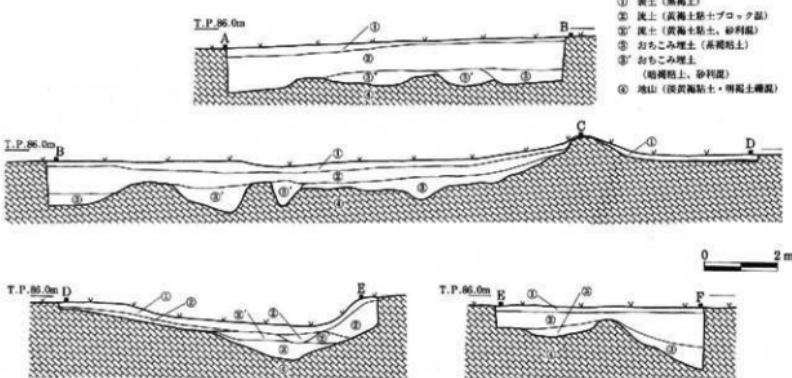
調査区は光明池の汀線に沿ったZ字形で、約200mに及ぶ（第5図・図版1・2）。調査区南東は満水時の光明池の浸食によって地山ごと流出している。また、調査区中央に尾根状の張り出しがあり、その両側は谷となり、上方からの流土による堆積で埋没している。また、調査開始前から上方に窯体の破片が散乱することが確認できた。以上により、調査開始直後から光明池48号窯は調査区の更に上方に位置し、二次堆積した遺物が灰原の一部、またはずり落ちた遺構が確認できると想定された。遺物は調査区中央の尾根状張り出しをB地区（中央）としその両側をA地区（北）、C地区（南）と呼び、三地区に分けて取り上げた。



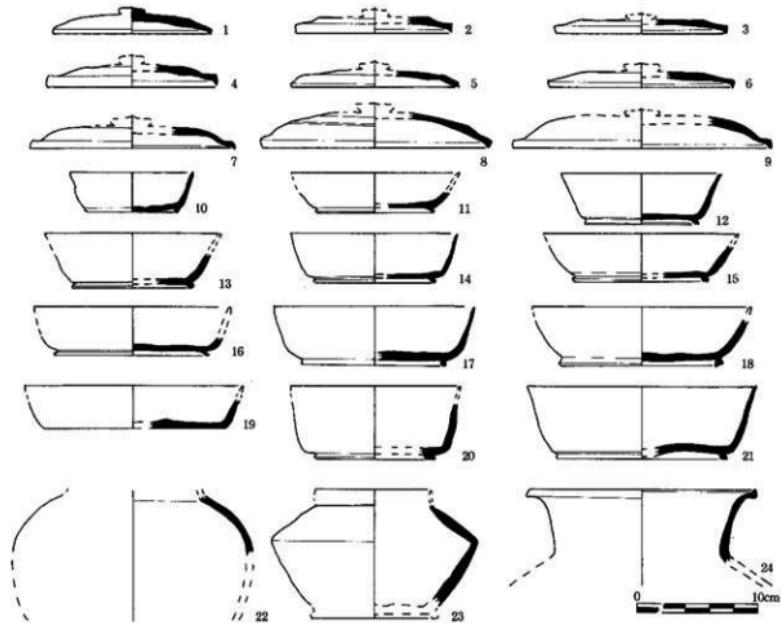
第4図 今回調査区と光明池48号窯（KM48）推定位置図



第5図 調査区位置図



第6図 調査区土層図

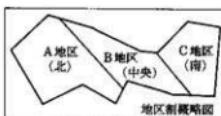


第7図 光明池48号窯出土須恵器 (1/4)

第2表 光明池48号窯実測須恵器登録対照表

擇因番号	図版番号	器種	口径・基高 (cm)・(cm)	地区・層位	実測番号	擇因番号	器種	口径・基高 (cm)・(cm)	地区・層位	実測番号		
7-1	4-1c	杯蓋	12.8・2.2	C 表土	1	15	4-1b	杯身	※ ※	B 黄褐土	36	
2		杯蓋	※ ※	C 表土	2	16		杯身	※ ※	B 黄褐土	16	
3		杯蓋	21.4	※	4	17	4-1f	杯身	16.6・4.8	B 表土	13	
4		杯蓋	14.0	※	3	18		杯身	※ ※	B 黄褐土	38	
5	4-1b	杯蓋	13.8	※	7	19		杯身	※ ※	C 黄褐土	9	
6		杯蓋	11.0	※	29	20		杯身	※ ※	B 表土	14	
7		杯蓋	16.8	※	8	21		杯身	18.8・5.9	B 表土	12	
8		杯蓋	18.4	※	6	22		壺胴部	※ ※	C 黄褐土	19	
9	4-1a	杯蓋	11.4	※	5	23		壺胴部	※ ※	B 表土	20	
10	4-1g	杯蓋	10.2・3.3	B 表土	11	24	4-1d	壺口縁	18.8	※	B 黄褐土	18
11		杯身	※ ※	A 表土	17							
12	4-1e	杯身	13.2・4.1	B 黄褐土	37							
13		杯身	※ ※	B 表土	15							
14		杯身	13.8・3.9	B 表土	10							

(※=測定値不詳)



2. 層序と遺構

堆積土は上方からの流入土が主である（第6図）。しかし、これらの土は以前に堆積したもののが地山ごと崩落して、凹地になった部分に新たに流入した可能性が高い。つまり、現在の地山面が大幅に崩れ去っている可能性がある。これはその上にあった遺構・遺物も下方に運び去ることとなる。事実、直下の光明池では渴水期に現れる池底に二次堆積した灰層を含む遺物包含層が確認できる。よって、光明池48号窯の大半はすでに崩落している可能性もある。また、試掘調査で焼土と判断した褐色土層は地山粘土層の中にある鉄分を多く含む硬い部分の可能性が高い。今回調査では焼土層は発見できなかった。あわせて、遺構も発見できなかった。

基本層序は10cm程度の厚みをもつ表土の下、黄褐色の粘土・細砂・小礫を含むブロック土の堆積による。これら黄褐色土の堆積は前年度調査区で示される第29～36層と同質のもので上方地山の流入による再堆積を原因とする。

3. 遺物

遺物は表土・黄褐色土・地山直上からみつかっている。概して、B地区の尾根状張り出しの先端に集中していた。発見された遺物は須恵器のほかにはコンテナにして10箱程度の窯体片がある。これは窯出しの時に破壊したものか、窯を作り直した時に廃棄したものと考える。須恵器は時期差がみられず、焼けひずんだり半焼けのものが含まれる。すべて光明池48号窯に伴う可能性が高い。

壺蓋は器高が低く、つまみが扁平な中・小型品である（第7図1～9・図版4, 1～3）。壺身は高台のないものがわずか一点のみであった。高台をもつ壺身は直径10.2～13.8cm、器高4cm程度と比較的小型が多い。高台は矮小化し、口縁端部も比較的厚く、奈良時代でも時期が降る特徴を示す（第7図10～21・図版4, 4～6・8）。

壺は3点発見された。いずれも小型で小片で全体がわかる例はない（第7図22～24・図版4, 7）。その他、試掘調査で直径20cm程度の皿が発見されている。口縁端部を厚く平らに仕上げる新しい要素をもつものである。

これらを勘案し、光明池48号窯が中村編年IV-3期、奈良時代後半頃に操業されていたと考える。

さて、発見された須恵器の特徴として、窯跡遺物として最も多く発見される甕の破片がほとんどなかったことが挙げられる。このことにより、窯で甕がほとんど焼成されなかつたと断言できないが特異な要素として指摘したい。

第III章 その他の窯の現況調査

1. 光明池41号窯の現況調査

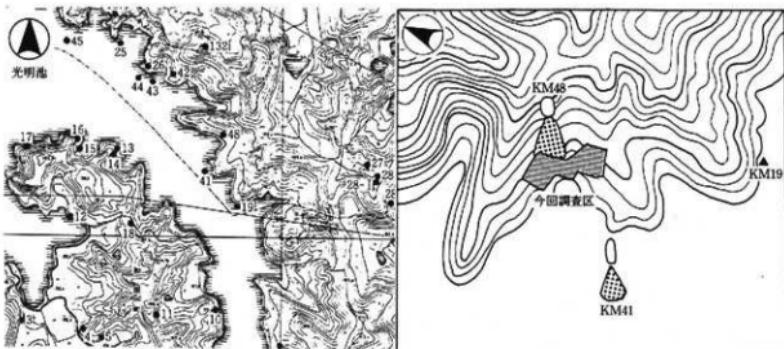
光明池41号窯は光明池41号窯の南、約100mに位置する（第8図）。窯体は丘陵斜面に露出している（第10図・図版3, 1）。露出部分は焼成部床面と考える灰褐色に変色した粘土とその両側の同じように変質した粘土による側壁である。側壁は上面を欠損し、幅約40cmの断面を観察すると内側は灰褐色の須恵質に変質、外側は暗灰白色、あるいは暗茶褐色で、その外側の地山も被熱によって赤く変色していた。赤く変色した地山は幅約65cmに及ぶ。露出した側壁から窯体の幅は約2.2mと推定できる。現況では床面や側面が貼り替えられたり、重複した痕跡はない。

焼成部の上端には煙道が予測されるがこの部分は地山が露出しており、すでに流出したと考える。また、下端には前庭部が予想されるがこの部分には光明池の波浪によって灰層と灰原の土器片を含む粘土が巻き上げられている。このような再堆積と浸食によって現況では判然としない。

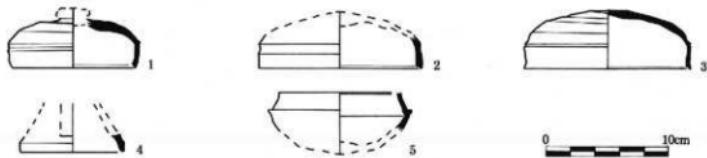
付近には側壁上面あるいは天井部の破片と思われる灰褐色の須恵質に変質した窯体片が散乱する。しかし、窯を補修した痕跡などを残すものはみられなかった。焼成部上面の地山上には焼成部を覆うようにU形の溝状の凹地があった。凹地には土師器の細片があった。現況では確実視できないが、この凹地は配水施設など、窯に伴う施設である可能性をもつ。この溝状の凹地は灰層がみられる位置から約10m程上方にあり、窯の全長もこの数値に近いのではないだろうか。

2. 光明池41号窯採集須恵器

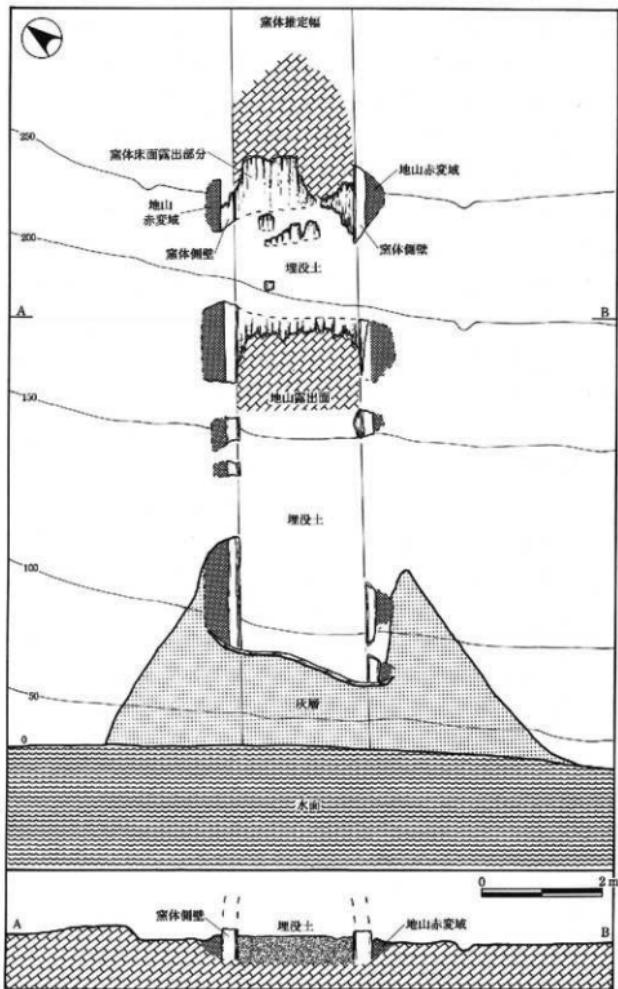
採集した遺物には壺・高壺・壺・甕などの破片がある。壺蓋は天井部が丸みをおび、丁寧に回転ヘラ削りし、口縁端部を丸く仕上げる（第9図1～3・図版3, 1～3）。壺身も同様に底部を丁寧な回転ヘラ削りによって丸く仕上げる（第9図4・図版3, 4）。口縁端部は尖り氣味である。高壺は脚端部のみで、やや尖る（第9図5・図版3, 5）。



第8図 光明池41号窯 (KM41) 位置図



第9図 光明池41号窯採集須恵器 (1/4)



第10図 光明池41号窯現況平面及び断面略測図

3. 光明池14号窯の現況

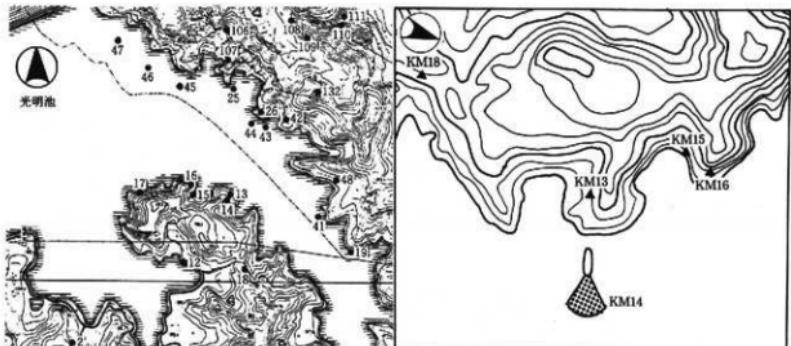
光明池14号窯は光明池48号窯の西、光明池をはさんで対岸、約200mに位置する（第11図）。窯体は他の窯同様に丘陵斜面に露出している（第13図・図版3, 3）。この窯の上方には光明池13号窯があり昭和38年に調査されている。この窯起源と考える奈良時代の須恵器片も散布する。38年の調査では古墳時代の須恵器はほとんど採集されていない。現在は逆に奈良時代の須恵器はわずかしか散布しておらず、古墳時代の須恵器はコンテナ1～2箱分が露出する。報告された写真から13号窯との位置関係を推測、14号窯の存在がその下方に位置づけできる。

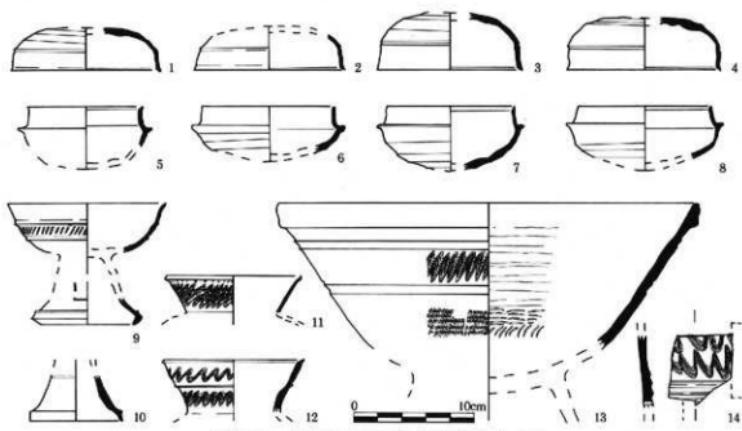
露出していたのは焼成部の側壁と思われる灰褐色の須恵質に変色した粘土である。13号窯の灰原が流出し、露出したのだろうか。側壁は上面を欠損し、幅約25cmの断面を観察すると灰褐色の須恵質に変質した粘土が二重になっている。その外側は暗茶褐色粘土で、さらに外側の地山も被熱によって赤く変色していた。赤く変色した地山は幅約90cmに及ぶ。露出した側壁から当初の窯体の幅は約3.8m、補修された窯体はこれより約40cm小さいと推定できる。

焼成部の上端には煙道が予測されるが埋没している。また、下端には前庭部が予想されるがこの部分には光明池の波浪によって灰層と灰原の土器片を含む粘土が巻き上げられている。この状況は光明池41号窯と同様である。また、付近には側壁上面あるいは天井部の破片と思われる灰褐色の須恵質に変質した窯体片が散乱する。

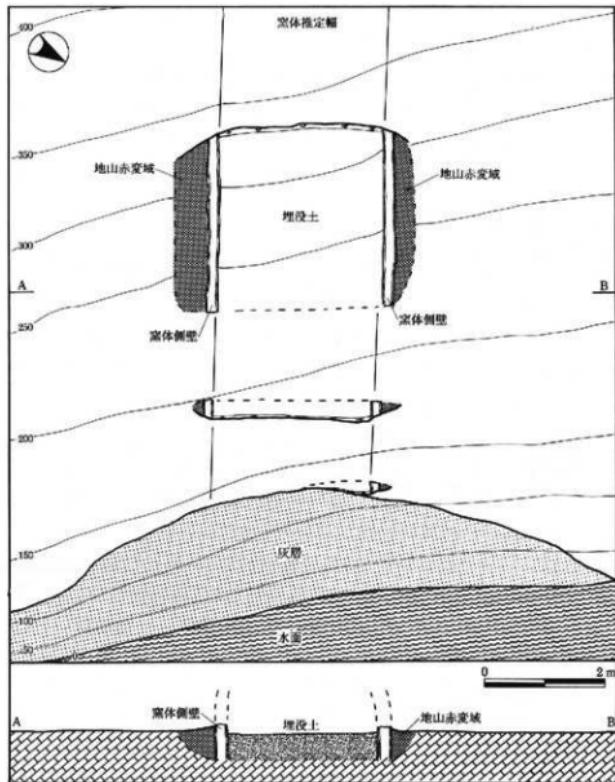
4. 光明池14号窯採集須恵器

採集した遺物には壺・高壺・壺・甕・器台などの破片がある。壺蓋は天井部が丸みを帯び、丁寧に回転ヘラ削りする（第12図1～4）。口縁端部は先端を外反させる。壺身も同様に底部を丁寧な回転ヘラ削りによって丸く上げる（第12図5～8）。無蓋高壺は口縁部が大きく開き、端部は丸い（第12図9）。波状紋を装飾する。脚端部（第12図9・10）は方形の透かしをもつものとないものがあり、端部は鋭く尖る。壺は上端まで外面に波状紋を装飾する（第12図11・12）。





第12図 光明池14号窯採集須恵器 (1/4)



第13図 光明池14号窯現況平面及び断面略測図

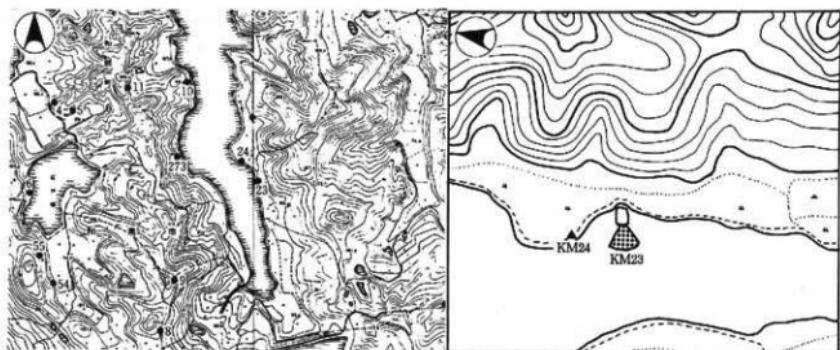
5. 光明池23号窯の現況

光明池23号窯は光明池48号窯の南、約600mに位置する（第14図）。窯体は他の窯同様に丘陵斜面に営まれたと思われるが窯体の露出はない。窯の存在を推測できるのはなだらかな斜面の一部にテラス状の窪みが連続しており、その下部には扇状に大量の須恵器片が散布しているからである（第15図・写真1）。テラス状の凹地は上段が幅約4.8m、奥行き3.2m、深さ約0.45mを測る。下段は幅約4.8m、奥行き2.2m、深さ約0.6mを測る。これらのテラスは窯体の陥没によって形成された可能性がある。明らかに自然地形とは異なる様相の陥没ではあるが、これが近年の盗掘によって形成された可能性も否定できない。現況ではちょうどこの位置に窯体を想定できると指摘したい。テラスには側壁上半あるいは天井部の破片と思われる灰褐色の須恵質に変質した窯体片が露出している。

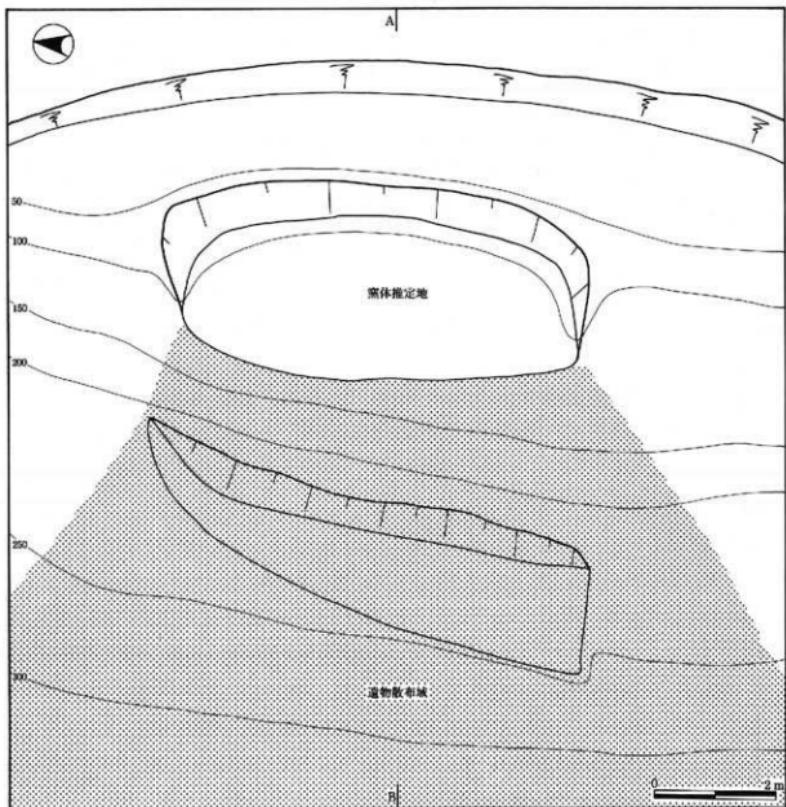
一方、テラスは光明池満水時の汀線から約50cm程下方にあり、上段テラスを窯体の一部とした場合、その上方は浸食により、流出してしまった可能性が強い（第16図）。ただ、現況では地山の露出はみられなかった。また、汀線上方は耕作などの土地改変で平滑にならされている。現在は遊歩道として整備され、旧地形を伺うことができない。

灰原と遺物の散布は上段のテラスを起点として下方に長さ約10m、幅約20mの範囲をもって広がっている。最も下の部分は光明池の浸食によって水平に再堆積した土中にとぎれることからさらに広がるものと予想できる。

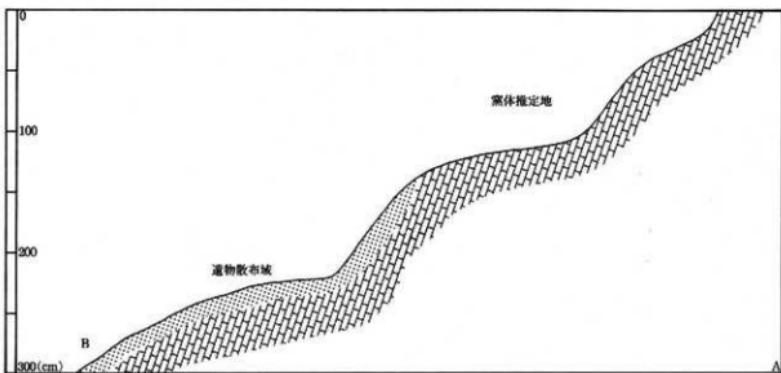
さて、これまでの分布調査では光明池23号窯の西方隣接地に光明池24号窯の存在が予想されている。確かにいくつかの須恵器が散布している。しかし、光明池23号窯と同時期の土器ばかりで光明池23号窯灰原散布の土器が流水等により移動した可能性がある。光明池の増水とともに流れる池底を流れる旧甲斐田川が灰原遺物を覆った時、ちょうど土砂が流れ着く位置に光明池24号窯の存在が予想されているからである。



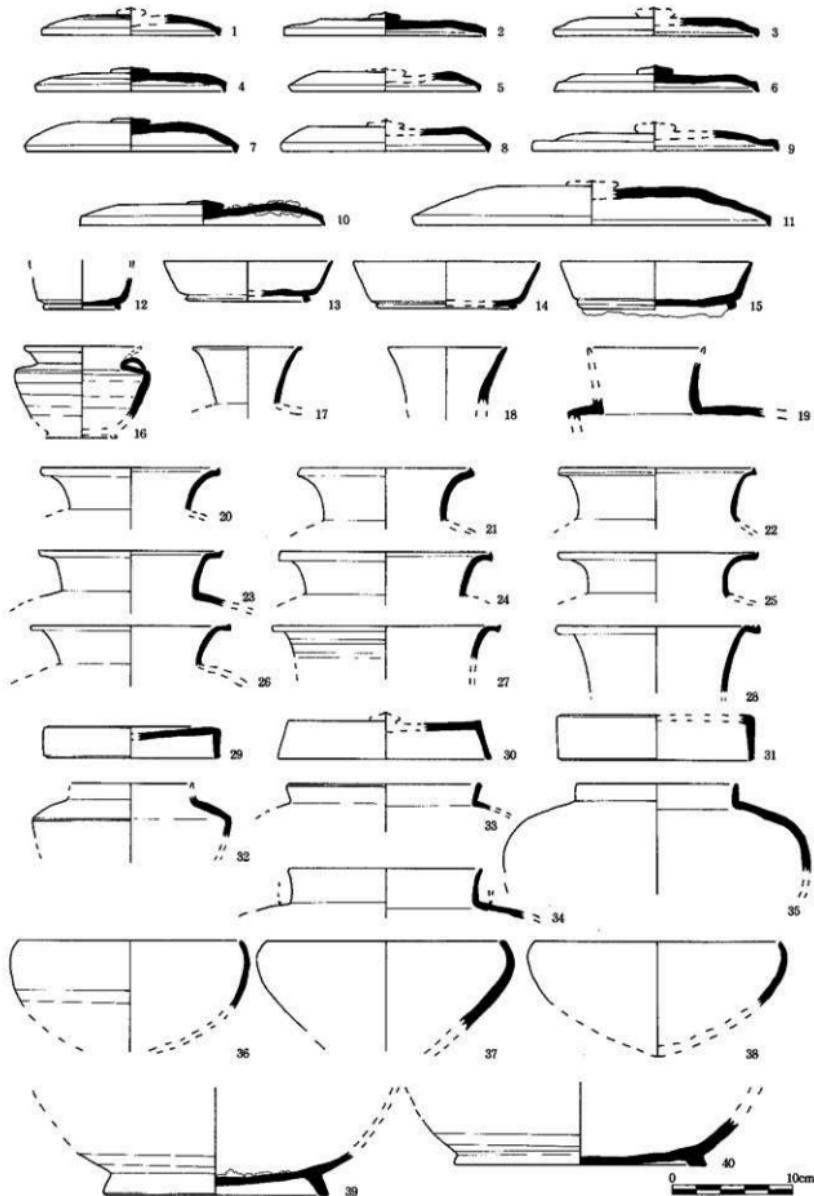
第14図 光明池23号窯 (KM23) 位置図



第15図 光明池23号窯平面略測図



第16図 光明池23号窯地形略測図



第17圖 光明池23号窯採集須恵器 (1/4)

6. 光明池23号窯採集須恵器

採集した須恵器は壺・壺・甕・鉢などの破片がある。

壺蓋は扁平で、天井部を粗く回転ヘラ削りする。口縁端部は先端をやや尖らせる（第17図1～11）。口径は14.2cm～29.0cmを測る。壺身は高台をもつもののみみられた（第17図13～15）。底部を丁寧な回転ヘラ削りによって仕上げるもの、高台はやや矮小気味である。概して、器高が低い小型品が多い。

壺の口縁部はa. 直立気味に外反するタイプ（第17図17・18）、b. ラッパ状に大きく開き、端部をつまみあげるタイプ（第17図16・20～28）、c. 短く直立するタイプ（第17図32～35）がある。aは口径が10cmをこえず、bは逆に10cm以下の口径のものはない。aは平瓶の口縁部（第17図19）と共に通する。cは口頸部の高さが2～4cmで、ちょうど口縁部をすっぽり覆う形の蓋がある（第17図29～31）。大型壺の底部は丸く仕上げられ、高い高台によって安定させている（第17図39・40）。その他、器高が10cmをこえない小壺がある。（第17図12・16）その他、筒形の壺胴部や長辺が4cm程度の台形で中央に穿孔した把手の壺などがある。骨蔵器など特殊な用途の壺だろう。

鉢は内外面とも丁寧にナデられ、最大径が20cmをこえる（第17図36～38）。端部は丸く仕上げ内斜させる。鉢底部はとがり気味に削り仕上げするもの、大型壺の底部と共に通するものもある。

発見された遺物からは顯著な時期差がうかがえず、窯操業期間も短かった可能性が強い。以上の特徴などから光明池23号窯は光明池48号窯より先行する中村編年N-1期、奈良時代前半頃に操業されたと考える。



光明池23号窯須恵器散布状況

第Ⅳ章 まとめ

今回発見された須恵器は5世紀後半～末（KM14・KM41）と8世紀（KM23・KM48）に分ける。

5世紀でもKM14・KM41が操業されていた頃は平野部の百舌鳥古墳群もいよいよ大型古墳が出そろい、古墳規模が縮小し、前方後円墳が少なくなる頃にあたる。墳丘や周溝の調査によってこれらの中小古墳からは須恵器の出土が認められ、陶邑で焼かれた須恵器が古墳の墳丘で執り行われる祭祀に利用されていたことが伺える。このような大規模古墳群を供給地にひかえた性格上祭祀用の須恵器が生産された器種の中でも発展していくことが予想できる。具体的には壺・甕・壺に劣らず、器台・はそう・高杯などの発見数があること、その型式変化がはやいことである。しかし、祭祀用に改良が進むにつれ、変化の方向は量産品・粗悪品としての性格が顕著になる。この方向は5世紀後半以降に府内の古墳数が急増するにもかかわらず、その規模が矮小化・画一化されていく方向と合致する。いずれにせよ、陶邑での須恵器生産が活発化する要因となったのは確かだろう。

一方、5世紀代は堺市百舌鳥綾南遺跡・土師遺跡・四つ池遺跡などの集落をはじめ、府内各地の集落からも多数の須恵器が発見されており、生活必需品として須恵器が急速に定着している。ところが、古墳時代後期の集落のうち古墳造営や窯業生産に関与するといった特種な集落を除けば弥生時代以来の伝統的な農業を基本とする集落は意外と確認されていない。つまり、須恵器の需要・供給に関する流通の解明は今後の課題である。

あわせて、光明池地域の窯業をになっていた人がどこにくらし、どのように製品を搬出したかも未解明な部分が多い。第Ⅰ章で想定した甲斐田川を製品搬出の動脈として生産地が東西に散在する構図を考えるならば、下流域に集落や工人などの墳墓が埋没していると考えたい。以上を含め、この地域に最初に須恵器生産をもち込んだ時期が須恵器定型化以前までさかのぼりえるのかも興味がもたれる。

今回発見された5世紀後半の窯跡は海拔にして80mをこえ、甲斐田川水系でもかなり奥まった斜面に位置する。下流から窯造営と伐採の開発がはじまったとすれば、その勢いは急速なものである。おそらく5世紀のうちに甲斐田川水系の窯業にかかわる開発は完成するのではないだろうか。このことは6世紀になって上流地域に窯がいくつかみつかっている程度で、6～7世紀の窯跡が甲斐田川水系にほとんどみられないことからも伺える。つまり、5世紀のうちに水系東西の斜面にあった森林があらかた伐採され、窯業生産に大きな痛手となったのではないだろうか。5世紀の窯跡とならんで多く発見されているのは8世紀の窯跡である。このことからも、再び本格的な生産が再開されるのは200年程後の奈良時代まで森林の回復に暇がかったと推測したい。

さて、8世紀の須恵器は生産遺跡よりも都城や寺院跡から発見された資料が詳細に検討されている。発見された須恵器は文献から遺構の造営年代が推定できる場合、紀年銘資料を伴う場合も

ある。一方、近年整理された光明池地域の窯出土須恵器によって消費遺跡の編年を補強する資料が充実した。これによると中村編年Ⅳ-1形式は三つに細分できそれぞれKM301・KM123・KM226の資料を指標とできる。これにKM131・KM29資料を加え、平城編年との対応関係も整理された。詳しくは報告に譲り、今後は以上の対応関係から各型式の存続期間の幅や重複期間の長短が生産地と消費地でより精確に検討されることが望まれる。今回発見須恵器は出土量や状況などから問題点をさらに掘り下げる資料ではなかった。しかし、光明池23号窯採集須恵器は概ね中村編年Ⅳ-1形式新段階の特徴が指摘でき、細分の有効性についてはうなづける。

最後に、現地調査は池岸斜面での作業が続いた。極寒の時期に調査に協力していただいた池上悦子・山脇恵子諸氏をはじめ、関係機関の方々に記して謝辞いたします。

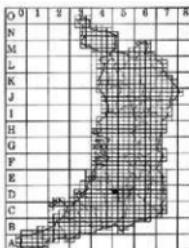
第3表 その他の実測遺物登録対照表

件名番号	図版番号	器種	口径・器高	出土遺構	実測番号	件名番号	図版番号	器種	口径・器高	出土遺構	実測番号
3-1		ナイフ形石器	- 4.4	KM18付近	21	21-11		环 盖	29.0 -	KM23	61
2		石 磨	- 2.4	KM24付近	22	12	4-2-h	小 壺	-	KM23	89
9-1	3-2-c	高環蓋	10.0 -	KM41	31	13	4-2-g	环 身	14.0 + 3.3	KM23	91
2	3-2-a	环 盖	13.3 -	KM41	33	14	4-2-i	环 身	15.6 + 3.3	KM23	90
3	3-2-b	环 盖	13.6 + 4.8	KM41	30	15		环 身	15.6 + 3.8	KM23	92
4	3-2-e	高環身	-	KM41	35	16	4-2-l	小 壺	7.5 -	KM23	75
5	3-2-d	环 身	10.1 -	KM41	34	17		壺 a	8.8 -	KM23	73
12-1		环 盖	12.2 + 4.0	KM14	40	18		壺 a	9.8 -	KM23	72
2		环 盖	12.4 -	KM14	25	19		提 瓶	-	KM23	74
3	3-4-d	环 盖	12.0 + 4.6	KM14	42	20		壺 b	14.6 -	KM23	69
4	3-4-c	环 盖	12.6 + 4.3	KM14	41	21		壺 b	14.0 -	KM23	71
5		环 身	9.6 -	KM14	43	22	4-2-d	壺 b	16.2 -	KM23	70
6	3-4-f	环 身	11.0 -	KM14	26	23	4-2-f	壺 b	15.0 -	KM23	64
7		环 身	10.5 -	KM14	44	24	4-2-j	壺 b	17.6 -	KM23	63
8	3-4-e	环 身	10.9 -	KM14	45	25		壺 b	16.4 -	KM23	66
9	3-4-a	高 环	13.0 -	KM14	23	26		壺 b	16.6 -	KM23	62
10		高 环	-	KM14	24	27		壺 b	19.0 -	KM23	68
11		壺	11.2 -	KM14	47	28		壺 b	16.8 -	KM23	67
12		壺	11.6 -	KM14	48	29	4-2-c	壺 盖	14.6 + 2.5	KM23	80
13	3-4-b	器 台	-	KM14	50	30		壺 盖	17.4 + 3.1	KM23	81
14		器 台	-	KM14	28	31		壺 盖	15.0 + 3.7	KM23	82
17-1		环 盖	14.2 -	KM23	60	32		壺 C	10.0 -	KM23	77
2		环 盖	16.6 + 1.9	KM23	52	33		壺 C	16.2 -	KM23	78
3		环 盖	16.8 -	KM23	57	34	4-2-k	壺 C	16.0 -	KM23	76
4	4-2-a	环 盖	14.6 + 2.0	KM23	51	35		壺 C	13.2 -	KM23	79
5		环 盖	15.6 -	KM23	58	36		鉢	18.2 -	KM23	83
6		环 盖	16.6 + 2.2	KM23	53	37		鉢	18.8 -	KM23	86
7	4-2-b	环 盖	17.7 + 2.8	KM23	54	38	4-2-e	鉢	20.2 -	KM23	84
8		环 盖	16.8 -	KM23	59	39		壺	-	KM23	88
9		环 盖	20.2 -	KM23	56	40		壺	-	KM23	87
10		环 盖	20.2 + 2.0	KM23	55						

報告書抄録

ふりがな	すえむらかまとぐんはっくつちょうさがいよう・II
書名	陶邑窯跡群発掘調査概要・II
副書名	府営ため池等整備事業「光明池地区」に伴う調査
巻次	II
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-0008 大阪市中央区大手前2丁目 206(6941)0351
発行年月日	1999年3月31日

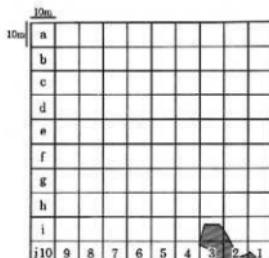
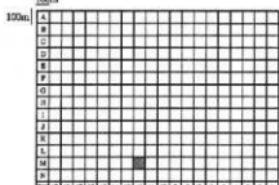
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すえむらかまとぐんはっくつちょうさがいよう・II 陶邑窯跡群	おおさかしらやまだい 界市城山台 5丁	27201		34° 27' 37"	135° 29' 20"	1998年11月1日 ～ 1999年3月31日	200m ²	ため池整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
陶邑窯跡群 光明池48号窯 光明池41号窯 光明池14号窯 光明池23号窯	窯跡	奈良時代 古墳時代後期 古墳時代後期 奈良時代	灰原 窯体 窯体 灰原	須恵器 須恵器 須恵器 須恵器				



13	14	15	16
10	11	12	
5	6	7	8
1	2	3	4

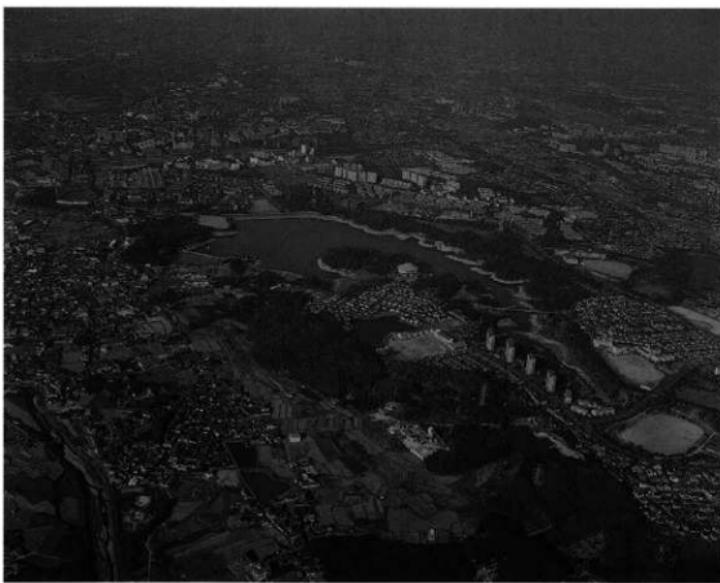


5m	I	II	III
5m	IV	V	VI



陶邑窯跡群（光明池地区 II）地区割表示図

図 版





KM41

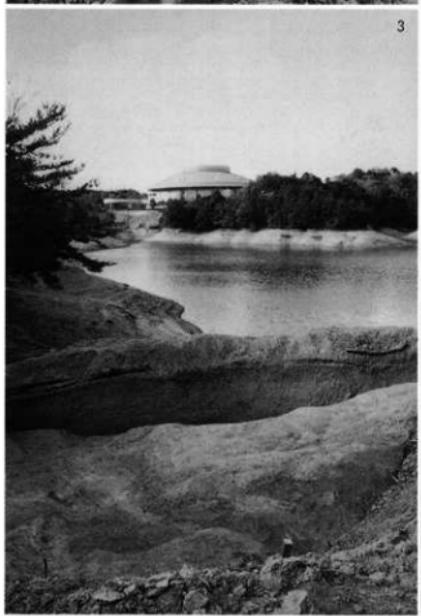
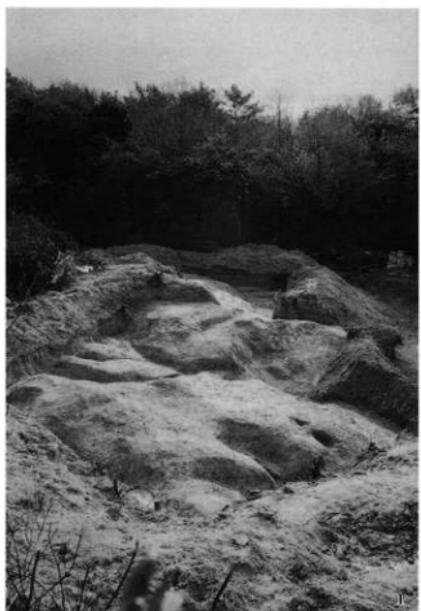
1. 調査区遠景
(西から)



2. 調査区遠景
(南から)



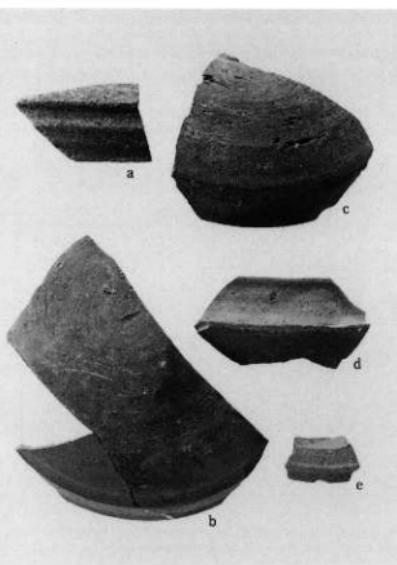
3. 調査状況
(北から)



1. 調査区全景（北から） 2. (南から) 3. (東から) 4. (東から)



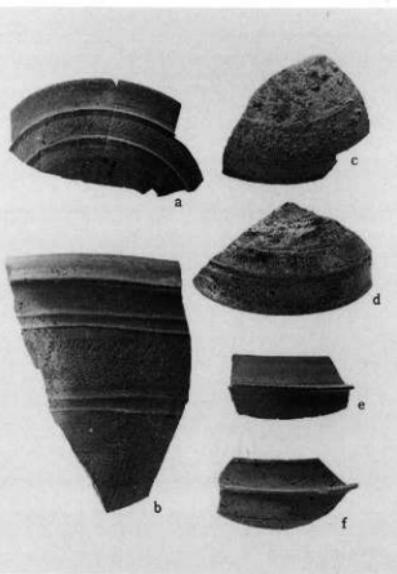
1. 光明池41号窯現況



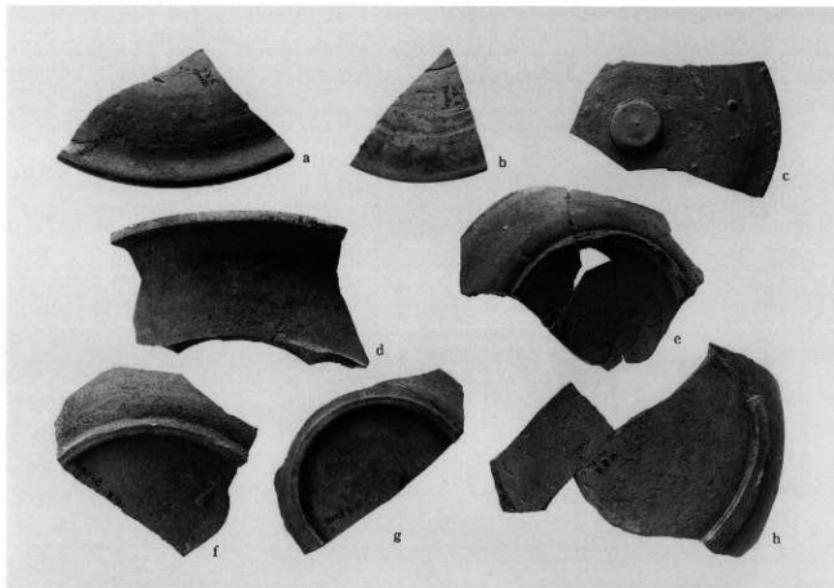
2. 光明池41号窯採集須惠器



3. 光明池14号窯現況



4. 光明池14号窯採集須惠器



1. 光明池48号窑出土須恵器



2. 光明池23号窑采集須恵器

